

沖縄歴史の散歩道

グスクを歩く

本土復帰50周年企画として、「群星」紙上及び沖縄総合事務局ウェブサイト「オキナワンパールズ」にて歴史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を紹介します。 <https://www.okinawan-pearls.go.jp/>



知念グスク(新グスク)

首里城をはじめとした沖縄を代表する「グスク」。2000年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」としてユネスコの世界文化遺産に登録され、観光地としても人気を集めています。いわゆる琉球王国時代に築かれた「城」なのですが、曲線を描く琉球石灰岩の石垣やアーチ門、天守閣がなく中国の宮殿風の建物など本土の城とは異なる沖縄独特のつくりをしています。この「グスク」、さらに深く掘り下げてみると、さまざまな「顔」を見せてくれます。

まず特筆すべきことは、グスクの数です。この小さい南西諸島に総数なんと300も存在しています。沖縄の島々はグスクだらけと言ってもいいでしょう。しかもそのすべてが世界遺産のような「城」の形をしておらず、実に多種多様な姿をしているというのも面白い点です。

たとえば南城市の奥武島にあるタカラグスク。島の中央の丘陵部にあるこのグスクは、なんと墓そのものの形をしています。「タカラ」とは琉球の古語で「貴人の骨」を意味します。つまり墓をグスクと呼んでいるのです。案内板には「タカラ城(グスク)」の表記の横に英訳で「Takaragusuku Tomb(墓)」とあり、見学者は混乱してしまいそうです。また同じく南城市玉城にあるミントングスクはただの琉球石灰岩の

岩山です。ここは琉球の創世神アマミキヨが居住した地として聖地となっていますが、城として使えるような場所ではありません。



タカラグスク

このようにグスクと呼ばれる場所は城のほかに墓や御嶽(聖地)、集落跡などさまざまな形態をしていて、はたして「城」と定義していいのだろうかという疑問も出てきます。実際、研究者の間でもこの「グスクとは何か」という問題は議論されたことがあり、「グスク論争」と呼ばれています。結局この議論は、さまざまな形態には時期差があるのではないかと、という結論に落ち着きました。つまり原初のグスクは墓や聖地、簡単な石積み囲いのような形をしていて、それらが発展し、按司の居館として城となり、最終的には首里城のような王宮になったのではないか、ということなのです。

上里 隆史(うえざと・たかし)

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』(福音館書店、2020年)、『海の王国・琉球』(ポードーインク、2018年)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社、2016年)、『尚氏と首里城』(吉川弘文館、2015年)など。NHKドラマ「テンペスト」の時代考証を担当。



知念グスク(古グスク)

実際に、南城市の知念グスクは古グスクと新グスクの区画に分かれており、古グスクは丘陵の上を低い野面積みで囲っただけの造りで、内部には御嶽があり、アマミキヨが降臨した聖なる地です。後に増築し、相方積みの城壁とアーチ門が備わった「城」としての機能が加わったことがわかります。